

花うさぎの「世界は腹黒い」

日本が普通の国になるように。
産経新聞を応援しています。

内調公安・TBS は北とズブズブ！（2011/05/06）

(<http://hanausagi.iza.ne.jp/blog/entry/2272111/>)

元日経記者・杉嶋岑氏が桜の番組で告発！
日本の情報機関の腐敗とマスメディアの裏切りに警鐘の告発本

花うさぎ

検索

<http://hanausagi.iza.ne.jp/blog/>

このほど「北朝鮮抑留記 我が闘争二年二ヶ月」を草思社から出版した元日本経済新聞記者・杉嶋岑氏はチャンネル桜の番組に出演し、西村幸祐氏の質問に答えるかたちで、敵国である北朝鮮と日本の内調・公安やTBSなどがズブズブの関係にあると名指しで非難、この本が告発本であることを明言した。

氏は平成11年12月、五度目の訪朝の際にスパイ容疑で逮捕され、二年二ヶ月に及ぶ拘束を余儀なくされた。この間に公安などに協力して渡していた写真やビデオ、資料がことごとく北朝鮮に渡っていた上、平成12年6月には実際には 裁判も判決も受けていないのにTBSが「有罪判決」と報道したことなどに衝撃を受け、帰国後も文藝春秋への手記、国会での参考人陳述などを行ってきた。

今回、帰国後9年も経過してから本格的な回想記を出したのは、「国家概念を喪失した今日の日本の情報機関やマスコミ関係者の危機管理意能力の無さと、逆に敵国への迎合性など、恐るべき堕落ぶりを身を以て知らされた。『日本は今や国家の体を成しているのだろうか』とさえ痛憤した」からという。(ニュース調こまで)

北朝鮮抑留・38度線の向こうで見た売国の現実



【杉嶋 岑】西村幸祐が聞く [桜H23/5/4]

この事件、うかつにも私は「そういえばそういう報道があったな」程度の認識で、記憶の彼方に消えていたのですが、今回の桜の番組を見て、改めてその持つ意味の大きさを再認識した次第です。いまや反日度ではテレ朝を凌ぐ勢いのTBSですが、同じ桜の番組で高森明勅氏が平成18年12月に詳しく解説した番組がありましたので、貼り付けました。

また、内調や公安に敵国と通じた人物がいるというのも驚愕の事実で、本格的な保守政権を早く樹立して、こうした輩を一掃しなければならぬと改めて思いました。以下、本のニュースリリースの一部と、杉嶋岑氏が平成14年7月25日(木曜日)の衆議院・安全保障委員会で参考人として述べた記述の一部を収録しました。

日本の情報機関の腐敗とマスメディアの裏切りに警鐘

この本は9年前におきた元日本経済新聞記者の北朝鮮での拘束事件を当事者が初めて綴った回想記です。これまで解放直後、短い手記は発表していたものの単行本という形で事件の全貌が語られるのは初めてであり、当時ニュース等で伝えられていた事件の真相が本書において詳細に明らかにされました。驚くべき体験記です。

著者は訪朝時の平壤でスパイ容疑をかけられ突然拘束されました。日経を定年退社後のごく個人的な観光旅行の途中であり、五回目の北朝鮮訪問時でした。

捕まってみて分かったのですが、過去の訪問時に内閣情報調査室と公安調査庁に写真やビデオなどを提供協力した事実がすっかり北朝鮮側に伝わっていたのです。

同僚である日経ソウル支局長からの「彼はKCIAと付き合っていた」という趣旨の誤解に満ちたファックス情報まで北朝鮮の調査官は入手していました。本書で著者は日本の情報機関がいかに墮落し、またマスメディア内にも裏切り者がいることを痛烈に告発しています。本書は、2年2ヶ月の長きにわたって抑留され、いわれなき辛酸をなめた当事者にしか書きえない日本への衷心からの警告の書といえるでしょう。



杉嶋 岑(すぎしま・たかし) 著

四六判上製 360ページ

定価2415円 2011年3月

元日経記者のスパイ容疑での拘束事件の全貌。

当事者が初めて書いた抑留体験記。

杉嶋岑氏の意見陳述

第154国会 安全保障委員会 第9号 平成14年7月25日(木曜日)

マルクス経済学者に疑問

杉嶋参考人 このたび、参考人として意見陳述する機会をお与えくださりまして、まことにありがとうございました。(中略)

私が見た北朝鮮の内外政策というのは、パルチザンの発想と手法で貫かれておりまして、主観の論理、そして力の論理しかない国です。このような国は、相手が自分より強くて、団結して真剣に挑んでくると譲歩する可能性がありますけれども、とても尋常な話し合いでは応じるとは思えません。

ですから、我々は、拉致問題にしても、他人事のように考えず、国民一人一人が自分自身の問題としてとらえて、打って一丸となって政府を支援し、また、政府はそれを受けて、小細工などせず、正々堂々と毅然として対北朝鮮政策をとってほしいと思っております。

私は、社会主義が計画経済を遂行する上で必要とする強大な国家権力が必ず体制下の国民生活を圧迫するとの確信を持っておりまして、六〇年安保の世代でありながら、当時、マルクス経済学者たちが、社会主義へ移行するのは人類にとって歴史的必然であると学生や社会を扇動していたことにも、本能的なおそれと疑問を抱き続けておりました。



『花うさぎの「世界は腹黒い」』お勧め動画
マスコミが報じない正しい歴史、日本が好きなのは必見！
「凜として愛」「氷雪の門」「誇り～伝えよう日本のあゆみ～」
「めぐみ」「日本がアジアに残した功績」「真実はどこに...」

iza プログランキング
【全体】6位 【政治】3位
(2011年2月8日時点)

日本経済新聞に入社後も、なぜ全世界が社会主義化しないのか、それどころか社会主義諸国の経済発展がなぜおけているのかをみずから検証するために、旧ソ連、旧東ドイツ、中国、ベトナムなど社会主義国めぐりをし、この延長線上に北朝鮮があったわけでありませぬ。

内調の内山氏・小島氏と公安の小林氏・黒岩氏

私は、一九八六年の第一回の訪朝の後、同じ日本経済新聞社に勤めている同僚記者に、内閣情報調査室と公安調査庁関東公安調査局に連れていかれまして、その当局から日本の安全のために協力してほしいと懇請され、ささやかな愛国心から協力を約束しました。

内調で私を担当したのは、当時一課課長代理で防衛大学一期生の内山實人氏と調査官の小島勝成氏でした。一方、公安庁は、担当官が何人もかわりましたけれども、私が拘束される寸前の担当官は黒岩和英氏と小林又三氏でありました。正直申し上げて、私は、この人たちに協力することこそが、愛する祖国日本の平和と安全を守り、祖国への忠誠心を示すことだと考えて協力を励みましたが、結局彼らに裏切られた思いです。

といいますのも、この人たちは、特に公安庁に手渡した写真やビデオ、供述資料、これがことごとく北朝鮮情報当局に渡ってしまっていることが取り調べの初期の段階で露呈され、慄然としました。これはもう機密が漏れているというより、敵国側に情報提供するシステムができ上がっているといしか言いようがありません。

情報を保管している部屋に出入りできるすべての職員が疑わしいとさえ言うことができます。私は、第三者機関によって徹底した調査が行われるとともに、利敵行為を働いた者には厳罰に処する法律を早急に整備してほしいと思っております。

情報戦争激化の今日、収集と同時に情報の管理もまた重要さを増しております。日本国及び日本国民に対する忠誠心に満ちた、真の意味で国益とは何かのわかった質の高い職員で情報機関を再構築するべきではないかと考えております。私が北朝鮮に拘留中、情報機関のトップの秘書は、私に、日本の公安はざるのようなものだ、内調もよく似ているけれども、少しガードがかたい程度である、日本全体は、防諜関係からいったら全く丸裸同然であると言われました。何たる屈辱かと思ひながら、私はじっとこらえて聞いておりました。

TBSの岡元隆治外信部長

私の身柄引き取り交渉に進展が見えず、日本国政府の態度に業を煮やした焦りからか、二〇〇〇年六月二十一日にピョンヤンで記者会見を開き、日本国政府に圧力をかけるという計画がございました。そのとき、私の担当調査官は、日本の有力メディアが、とにかく一発記者会見をピョンヤンで開いてくれれば、我々はそれを受けて日本の政府に働きかけるということになっていると言いました。

私はびっくりしまして、私の帰国運動に名をかりた身の代金要求交渉を進めようとしている北朝鮮のお先棒を担っている日本の有力メディアはどこかと考えました。帰国後、そうした北朝鮮側の情報操作の受け皿が何とTBSだったことを、家内へのTBS外信部長岡元隆治氏の手紙で判明しました。

二〇〇〇年六月二十一日夜、私がまだ北朝鮮で裁判も受けてなく、したがって有罪判決も下っていないのに有罪判決だと報道し、驚いた家内がTBSに問い合わせた手紙を出したのでした。TBSは、とんでもない誤報をして我が家庭を苦しめたばかりでなく、図らずも北朝鮮の情報操作に踊らされたことを暴露する結果になりました。

同じ日の午前十時に予定されていたピョンヤン・人民文化宮殿での私の記者会見が急遽取りやめになったのは、恐らくTBSが私の身柄についての報道をするということで北朝鮮側と話がついたということ、今にして合点がいく次第であります。

ですから、今後日本のマスメディアは、北朝鮮とのパイプづくりには、決して独占情報欲しさに北朝鮮側の言いなりになって大金を使った上に利用されないよう十分注意し、軸足はあくまで日本に置き、日本の国益を守り抜くように心してほしいと思います。

最後に、国家機関が善意の国民に協力を求め、それによって生じた国民の受難に対しては、何らかの公的な謝罪や補償があつてしかるべきではないかと思ひます。特に公安庁のように、頼むときは頼んで、その国民が受難に陥ったとき、知らぬ存ぜぬのトカゲのしっぽ切りのような扱ひでは、だれもそのような政府機関を信用して安心して協力しなくなります。これは有事法制以前の問題です。

日本が有機的統一体として機能し、かけがえのない祖国の平和と安全を守り、新しい時代の国民的連帯感を醸成するためにも、政府と国民が信頼関係を築く道筋を政府は率先して示すべきではないでしょうか。

御清聴ありがとうございました。

